
はにわ ぱにっく

遠堂 沙弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はにわ ぱにっく

【Nコード】

N6690H

【作者名】

遠堂 沙弥

【あらすじ】

学校でマドンナとされる美少女・透子。いつものように親友の舞と下校中に、道端で倒れてる人を発見！助けてみるとそれは大きなハニワだった！？世紀末の日本に現れたハニワが織りなす、人間の本当の美とは？・・・そんなお話。

1999年、もうすぐ21世紀を迎える日本……。これは21世紀の日本の運命を変えた、ある一人の女子高生の物語である。

今日も学校を終えて、二人の女子高生が一緒に話をしながら下校している。

茶髪のショートヘアをした少女が、長い黒髪の少女に突然疑問に思っていたことを話し始める。

「ねえ透子、クラス中のみんなが不思議がってたよお!？」

3年の中で一番カツコイイ野田先輩をフルなんて……。信じられないって。

あたしもそう思うよ、ねえ……。なんでふったりなんかしたの!？」

話の内容は今日の昼休み、この物語の主人公である透子が上級生の美青年に告白されたようだった。

彼は学校内ではかなりのイケメンでルックスも良く、ファンもたくさんいたらしいのだが透子は彼の告白をいともあっさり……。簡単に断ったのである。

それを親友の舞が、なぜふったのかを問いただしているのだ。

「あなたなら理由はとっくにわかってるでしょー!？」

あんなルックスだけの男なんて願ひ下げにきまつてるじゃない。

他の先輩の話だと、あの野田って人……。

何人もの女を取っかえ引っかえして遊びまくってるって言うのよ!?!信じられる!?!

そんなクズ男とどうしてこのあたしが付き合えるって言うわけ！
？」

舞は呆れた顔で透子を見つめる。

野田先輩のことはともかく、この透子は確かに誰がひいき目に見ても・・・かなり可愛かったりする。

同性の自分から見てもそれは悔しいが認めざるを得ない・・・。
だから多少上から目線でこんな台詞を吐いたとしても・・・、ムカつくけど許してしまうのだ。

「でも・・・カッコイイじゃん？

ウワサだとモデルとしてのスカウトが来てるって話だしさ・・・、
それにあんなきれいな男の人って滅多にいないのに。」

「舞さあ・・・、あんたってつくづく顔重視ね。」

「・・・透子よりはずっと美的センスがマシなだけよ。
だってあんたって・・・。」

そう言いかけた時、背後から苦しそうな男の声が聞こえて来た。

「マネージャー！」

その声に舞が恐る恐る振り向くと、夕日に映る巨大な影・・・。
そう・・・、我が高校が誇る最強の相撲部の部員達だった。

「みんな・・・、今日もお稽古お疲れ様！

また明日ね！！」

「うーっすーっすー！」

透子が満面の笑顔でその声をかけると、相撲部員達はどしどしと夕日に向かって消えて行った……。

笑顔がひきつる舞とは反対に、透子はふっと遠い目になりながら……
舞を諭す。

「舞……、男ってのはね……外見じゃないのよ？」

その言葉に舞の脳裏には「嘘つけ！」という言葉が瞬時に浮かんだ。しばらく歩いていると、二人の目の前に誰かが倒れているのを発見する。

見た感じ……、丸々とした体形の人だった。

透子はその人物が目に入るや否や、まるで運命の出会いかのように脳内に花びらが咲き乱れて鼓動が高鳴るのを感じる。

（ああ……っ!!）

あの一見人間とは思えない横たわった巨大な姿……、そして見てすぐ100キロ以上はあると思われる肉の壁……っ!!

そして何より……、3サイズを上から150、150、150だとすぐわかる位に巨体中の巨体だわっ!!）

まるで理想の男性像に巡り合ったかのようなリアクションをする透子が急いで駆け寄る。

舞はひくひくとしながらも、とりあえず人命救助だと言い聞かせて一緒に駆け寄った。

「大丈夫ですか？」

舞は恐る恐る声をかけたが、透子のそれはどこか黄色い声色だった。声をかけた瞬間……二人は悲鳴を上げる。

倒れていてこっちを振り向いたのは人間とは言えない姿・・・、そう・・・ハニワだったのである。

パニック状態になる二人だがハニワはこうなることを既に把握しており、ゆっくりとなだめるように話し始めた。

「あの・・・、すみません・ぽー。」

僕ってよくこうやって他人に驚かれるんですよね・ぽー。」

大丈夫・ぽー。」

それよりお願いしたいことがあるんですが、よろしいですか・ぽー！？」

話し方が無性に癪に障ったが、そのハニワの純朴な眼差しに断れなかった二人は、とりあえずしゃがみこんで話を聞く。

「あの・・・騙してすみません・ぽー。」

実は僕・・・人間じゃないんです・ぽー！」

「ハナから知つとつたわ！！！」

瞬間つつこむ二人に、ハニワはがくぐんっとショックを受けている様子だった。

最も・・・元々ぽかーんと口を開いている状態なので、どんな表情をしてもさほど変わりがなかったのだが・・・。

すると舞はマンガやアニメの知識から、素早くこれからの展開を予想し始めた。

そう・・・、舞は隠れオタクだったのだ。

「あたしが見たところ、あんたは地球を征服しようとして宇宙から来た侵略者ね！？」

びしいつと指をさしながら豪語する。
否定しようとするハニワの言葉を遮って、舞は更に一人演説を披露した。

「そう・・・、あなたこそかの有名なノストラダムスの予言にあったアンゴルモアの大王なのよ！」

そして勿論、火星人で・・・破滅へと自ら突き進む人類に鉄槌を下す為にやって来た！！」

殆ど息継ぎなしで言いきった舞は、息を切らしながらハニワに向かって挑戦的な視線で同意を求める。
ハニワは変わらない表情のまま・・・、ぽかんとした顔で話し始める。

「実は僕、母星の命令で毎回世紀末の年に地球にやって来て人間の感覚を研究してるんです・ぽー。」

僕はその何代目かにあたりまして・ぽー。」

無視&ハズレにショックを受ける舞。

「明日丸一日、僕も人間の輪の中に溶け込みながら人間の感覚をインプットして母星に帰るんだ・ぽー。」

そこで君達にぜひ協力してほしいんだ・ぽー。」

丸々とした体に見とれながら、透子の表情はすでにOKサインを出していたので急いで舞が阻止する。

「ちよつと透子、馬鹿な考えはやめな!？」

こういうのって大体アメリカの・・・なんだっけ?確か・・・NASAとかが関わってるもんなのよ!？」

あたし達がこの宇宙人と仲良くしてたら絶対巻き添え食って殺されちゃうよっ!!」

半狂乱になりながら反対する舞に対して、透子は落ち着いた口調でなだめる。

「でも舞、あたし達はもうすでに関わってしまったているのよ!?!今更無関係なんて言ったらNASAだって納得するわけないじゃない……。」

舞、これは人助け……じゃない、八ニワ助けよ!

「八ニワじゃない・ぽー!」

ちよつとムツとした八ニワが否定するも、その横でがっくりと肩を落とした舞は諦める。

「明日一日だけだもんね……、わかった。」

それにちよつと楽しそうかなって思ったりしちやったりなんかしちやったり……。」

すつくと八ニワが立ち上がる。

「それじゃ今日のところはどこかに隠れておく・ぽー!」

明日の朝また会いましょう・ぽー!」

そう言うと、八ニワは突然二人の目の前から忽然と姿を消してしまつた。

しばらく呆然と……沈黙する二人。

「隠れる場所って……、まさかあたし達の家とか言わないでしょ

うね!？」と、透子。

「ああ・・・宇宙人!!!」

異世界から来た王子様とかじゃないのが残念だけど、・・・これはマンガのネタになるわ!」

「・・・ならないでしょ、こんなありきたりな展開・・・。」

そして翌朝、何の変化もなく登校してくる透子と舞、・・・何も無いのがかえって不気味だった。

なさすぎて昨日のあれは夢だったのかと思さえする。すると担任が突然転入生を紹介し出した。

「どうも、山田タリーです・ぽー。」

よろしくお願いします・ぽー。」

巨大なハニワにそのまま学校の制服を着せた怪しい物体が姿を現すが、しゃーんと椅子から転げ落ちる透子と舞が、起き上がりざまに腹の底から叫んだ。

「変身能力とかないんかー！ー！っ!」と、同時に透子も叫ぶ。

「タローだろ、山田と来たらタローでしょ!?!?」

なに本音出してんのよ、ホントは自分でもこんなのタリーとか実は思ってるんでしょ!?!」

突然叫び出す二人に、クラス中がどよめいた。

このままじゃ彼(?)が宇宙人であることがバレてしまう為、二人はタリーを掴まえると教室から出て行く。

とりあえず一目のつかない場所へ辿り着くと、透子達はタリーにアドバイスをする。

「あなたも人間の輪の中に溶け込みたいんなら、もっと人間らしくしないとダメじゃない！」

透子が胸ぐらを掴んでタリーに説教する。

「そうですか、すみませんでした・ぽー。

それではどのような姿をしたらいいのか教えてください・ぽー。」

透子が言おうとした瞬間、舞が阻止する。

「透子の美的感覚はズレてるから、あたしが教える！！オツケー？」

そう言うのと携帯していたカードをタリーに見せる。

それはアニメ雑誌の切り抜きだった。

「それもアカンやる。」

すかさずつつこむ透子。

仕方がないから二人は携帯の画像から、タリーに平均的な顔を参考にさせた。

それから教室に戻って、事なきを終える。

・・・勿論、生徒と先生はタリーの顔の違いにかなりの違和感と戸惑いを感じていたが・・・。

タリーはあくまで普通の人間の感覚を勉強する為に、二人はいつも通りの生活を強制された。

実はタリーの中では、ひそかに透子をターゲットに絞っていたのだ。なぜなら彼は人間の美的センスを研究する為に、この地球にやって

来たのだ。

それは同時にこの世界ではどんな男がモテるのか・・・、どんな女がモテるのか・・・。

そうだったものであったからだ。

透子にターゲットを絞ったのにもわけがある。

この学校に登校してきてから、透子の回りには男が群がり・・・透子が非常にモテていることを把握していたからだだった。

そして今日も透子に告白する男がやって来る。

今度はタリーと舞も陰ながら、様子を見について行く。

「透子さん・・・、僕は君が入学してきた時からずっと気になっていたんだ。」

どうか付き合ってほしい。」

舞の感覚からいって、ジャーニス系の入ったかなりのイケメンだった。

そして舞なら・・・、こんな相手に告白されたらソツコーでOKしているだろう。

しかし透子相手ではそうもいかなかった。

「ごつめーん、あたしあなたみたいな人はタイプじゃないから付き合えないわ。」

かなり自信があつた男子生徒は、パニックって反論する。

「な・・・なんでっ!？」

ルックスには自信があつたのに・・・、君のタイプって!？」

すると反対側から、透子が部のマネージャーをしている相撲部の人
が走って(??)来た。

「フーツ、フーツ、マネージャー！
主将が呼んでるんですけど・・・フーツ。」

部員の登場に透子は駆け寄って行って、さっきとはかなり違った態度になる。

「あらー中村君、汗びっしょり！
ほら・・・あたしのハンカチでよかつたらこれで拭いて！」

「そんな・・・もったいないっす！」

真つ赤になりながら遠慮する、とつても謙虚な中村君。

そんな二人のやり取りを一部始終見ていたイケメンが戸惑いながら指を差す。

「え・・・えっ!？」

透子さん・・・?なんでそんなに僕とあいつとで態度に違いが・・・?

いや、気のせい・・・かな？」

疑わしい視線で見えて来るイケメンに対して、透子がやっと彼の存在を思い出したかのように振り向いてこう言った。

「あ、そうだ。

あたしのタイプのことなんだけど・・・、あたし中村君が結構いいカンジなのよね！」

「はあ!？」

だって・・・、そいつはただのデブじゃないか！
僕の方がまだ・・・っ！」

そう言いかけた時、透子の顔に鬼神が宿る。

「うぬぼれてんじゃねえーっ！！」

あんななんかルツクスだけの軟弱坊やじゃない！！

デブを馬鹿にすんじゃないわよ、この体にまわりついた数キロの脂肪は立派な鎧も同然なのよ！

あんと中村君が仮にタイタニックに乗船していたとして、極寒の海に投げ出された時・・・骨と皮だけのアんたは

ソッコで凍死するけど、この中村君は自身の脂肪に守られて一命を取り留めることが出来るのよっ！！？

脂肪の素晴らしさの何たるかも理解できないあんたが、デブについてとやかく言う資格ないわ！！」

その様子を草陰で見ていた舞は苦笑しながら呟く、気のせいとその瞳には涙が浮かんでいた。

「透子・・・、せつかくきれいな顔してるのに・・・デブ専だもんね。」

そんな透子の様子を、静かに眺めるタリィ。

そして早くも放課後、クラブに入っている生徒達が盛んに部活動に励む時間。

相撲部のマネージャーである透子にとっては、この時間こそが至福の時なのである。

相撲部の控室で透子は、一人の相撲部員の体にベビーパウダーをはたいている。

「マナージャー、どうして自分にベビーパウダーなんか……。」
されるがままの長井君が質問する。

「相撲はまわしだけで出なくちゃいけないでしょ？
今は魅せる相撲よ！」

その為にはお肌の手入れはきちんとしていなくっちゃ……。」
そう言つて、ついポロリと本音が出る。

「綺麗な肌にしないと、抱きついても気持ち良くないし……。」

「え、今なんか言いました？」

思わず聞き逃す長井君。

「あ、何でもないので。気にしないで。」

(……やばかった！)

ここでうっかりあたしの夢を語ったりなんかして、みんなに嫌われたりしたらあたしの計画が台無しになっちゃうとこだ。

あたしの夢が実は、自分で手入れして育て上げた餅肌部員で人工ウオーターベッドしたい……なんて。

更に部員全員の餅肌で、押し合いへし合いのもみくちゃ状態にされたい……なんて。

あたしは今の和やかな関係を壊したくないのよ……！
だからまだみんなにそのことを知られるわけにはいかないわ……
！)

そんな様子も、勿論タリーはじつと見ている。

同時刻、相撲部屋の近くで怪しい黒ずくめの男二人が透子達の様子を見張っていた。

サングラスをかけた若い男・・・、アメリカ人っぽい男・・・ジョーンが小声で話す。

「・・・別にもう大丈夫なんじゃないですかね、相手が日本の女子高生ときてるんすから。

本やテレビで見ましたけど、日本の流行は女子高生が実権を握ってるっていうじゃないですか。

我々の出る必要ないですよ。」

先輩風のオールバックをした30代後半っぽい男、ベンジャミンが反論する。

「いや、そろそろタイムリミットだから最後に奴が認識した人物を見るまでは油断出来ない！」

もしここで奴が人間を誤った方向で認識してしまったら、21世紀の地球はどうなるか！」

ごくんと生唾を飲み込みながらベンジャミンが言う。

「・・・考えただけでも恐ろしいですね。」

そしてとうとうタリーが母星へ帰る時間がやって来た。

一旦部活を抜けた透子と舞が、タリーを見送る。

二人にお礼を言うタリー。

「透子さん、舞さん・・・どうもお世話になりました。ばー。

おかげで新世紀の地球のあり方が見えました。ばー。

「これも二人の協力のおかげです・ぽー。」

「あんなのでいいの？」

「あたし達は普通に学校生活を送ってただけなんだけど……。」
と、透子。

「あの……そんなことより、ギブ&テイクってことで今回の出来事をマンガにしたいんだけど、いいですか？」と、これは舞。

「舞……、あたし達は何もしてないのよ？」

「タリーも結局一人で勝手に納得してるだけなんだし……。」
それにこんなマンガにしたって売れっこないってば。」

「……そうね、タリー君って透子のことを見てただけってカンジだし。」

「マンガにしてもあんな面白くないかも……。」

「がつくりと肩を落とした舞は、マンガ投稿を諦めた様子だった。」

「僕達は毎回新しく認識した人間の姿で母星に帰ることにしているんです・ぽー。」

「これから未来の人間の理想の姿を特別に二人にお見せ致します・ぽー。」

「タリーの全身をまばゆい光が包み込むと、タリーは今までの人間バ
ージョンの姿から変化していった。」

「見守る透子と舞……そしてジョンとベンジャミン。」

「タリーの最終形態……、それは……デブだった。」

「タリーは透子の美的センスをそのまま人間の代表にしたのだ。」

「どうもありがとございました・ぽー。」

これで21世紀の美貌がこの姿なんだと流行らせることが出来ま
す・ぽー。

楽しみに待っていてくださいね・ぽー！」

そう言うと、恐らく宇宙船があるであろう上空へ向かって・・・タ
リーはふよふよと飛んでいく。

状況についていけない舞は、愕然としながら頭の中を整理する。

「え・・・、ちよつと待つて!？」

今あいつ何て言った!？・・・21世紀の美貌ってどういづこと
!？」

そんな舞をよそに、透子は満足しきつた顔でタリーを見送る。

「ええ・・・理想、まさに思い切り理想のスタイルだわ!

肉の付き具合や、美白肌でもっちりな所も完璧!!」

そんな時、あまりの展開に我慢できなくなったジョンとベンジャミ
ンが慌てて出て来る。

「ジョーダンじゃない!!」

あんなデブが新世紀の理想の姿だなんて、オレは認めんぞ!

あんなのが急増したら成人病や糖尿病問題どころじゃないぞ!!

ただでさえ肥満対策で頭が痛い時に・・・っ!!

この世がデブばかりになったら、土地の面積がいくらあっても
足りんじゃないか!」

あまりのデブ完全否定宣言に、透子がカチンとくる。

「ちょっと……、どこの誰か知らないけど肥満に対して随分な言いようじゃない?」

「ベンジャミン先輩、今すぐ彼に懇願しましょう!」
もう一度……再認識してもらってくださいよ!」

「おう、そうだな!」

二人がタリーの後を追おうとしたその時、透子が立ちふさがる。

「そうはさせないわ!

この世を肥満で一杯にしてやるんだからっつ!」

もはや透子、半狂乱。

「何を馬鹿なこと抜かすとんじゃ小娘があー!」

これは遊びじゃないんだぞっ!」

走って追いかけるベンジャミン、そのベンジャミンを追いかける透子、アホらしい急展開についていけない舞、透子達の後を追いかけるようにいまいち事情を把握してないだろうとジョンが説明する。

「あなた達、美的センスの時代の流れって知ってます?」

「はあ!? 何よそれ、何言ってるのか全然わかんないわよ!」と、透子。

「そうでしょうね……。」

あなた達も彼から聞いて知ってるのかもかもしれませんが……、彼等は毎回世紀末の年に人類をチェックしに来るんです。

その内容は、どんな人間がモテるのか・・・それがテーマなんです。

こんな話を聞いたことないですか？

某国ではホクロが沢山ある人間が絶世の美だと信じられ、そしてまたある国では足が小さければ小さい程美女だと・・・。

それらの美的センスのコントロールを行っているのが、彼らなのです。」

その話を聞いた舞は、不吉な予感がよぎる。

「・・・ってことは、タリー君が言ってた21世紀の美貌って・・・。」

顔面が蒼白になるジョンと舞。

「はい、このままだと21世紀には『デブ』が最高の美だということっ！」

うぐぐつとばかりに涙を拭うジョン。

「どうか我々に協力してくださいっ!!」

今すぐ彼を連れ戻して21世紀の美貌の再認識をつ!!」

そんな時、前を走っている透子が何かを企んだ笑い声を上げた。

「ふふふふふ・・・っ、それを聞いたからには協力するわけにはいかないわねっ！」

「ええっ!?!?」

ジョンと舞の聲が八モる。

・・・と、突然透子は口笛を吹いた。
するとどこからか・・・、何か巨大なモノがこちらに向かってくる
地響きが聞こえてくる。

地平線の彼方から透子の召集がかからなければ全て揃うことがない
と言われるデブ集団が、こっちに

向かって走って(？)来るではないか！

その集団を目にした舞が、恐れた声を上げる。

「あぁっ！！あれは・・・文化祭にもお目にかかることが出来ない
という『透子親衛隊 FROM デブ』の皆さん！？」

全員がそろったところなんて、あたしも初めてだわっっ！！！」

「さぁ！！あたしの愛する巨猫ちゃん達っ！！」

あの黒スーツ共を食い止めるのよっ！！！」

透子の命令に、デブ集団はまるで統率された精鋭部隊のように俊敏
な動きで舞達を先回りした！！

「うーっす、L・O・V・E my love透・子！！！」

なぜか巨体はベンジャミンの前に立ちほだかることに成功する。

「くそぉっ！！なんでお前達そんなに足が早いんじゃあ！！」

マンガかつ！？・・・これがフィクション小説だからかつ！？」

理不尽な状況に、思わず愚痴をこぼすベンジャミン。

「透子という方！！」

あなたはなぜそんなにまでデブに執着するんですかつ！？

あなたはなぜそんなにまでデブが好きなんですかつつ!？」

・・・と、愚問なジヨン。

一瞬沈黙が流れる中、・・・透子はゆっくりと真実を語り始める。

「・・・あたしのパパも。

そりやもう凄まじい程のデブだったのよ・・・、でも体は太っていても心はとてもピュアな人だったわ。

人の悪口なんて絶対に言わないし、自分が何を言われても、ただ笑うだけ・・・。

心はとっても傷ついているはずなのに・・・!!

そしてそんな悪口を言っていたのは、決まって平均的な・・・無個性な体型をした奴らだったわ。

あたしは外見だけで人を判断するあいつらが大嫌いだった!!

大好きなパパをけなす人たちはみんな!!

でもパパは人を憎んじやいけないって・・・、逆にあたしを叱ったの。

叱られたその日はどうして叱られたのかわからずに、ずっと泣いてたわ。

でも次の日の朝・・・、パパがあたしに謝ったの。

叱ってゴメンねって・・・。

その時にわかったの、あたしはパパが好き・・・。

パパの体に付いたものはただの脂肪なんかじゃない、愛情の塊なんだって!

でもその数日後、パパは交通事故で亡くなった・・・。

車にはあたしも乗っていて、あたしはパパの体がクッションの代わりになって助かったんだって聞いたわ。

パパの大きな体は、あたしをガラスの破片から守ろうと・・・、盾になって・・・っ!」

泣き崩れる透子に寄り添って、舞が声をかける。

「透子……、そんなツライことが……っ！」

しかし心の中では「お父さんの下敷きになって圧迫死しなくて良かったね」と、声をかけようとしてやめた。

ベンジャミン達の行く手を遮った透子親衛隊までが泣きじゃくる。

「うっ、うっ……、透子さん。」

そんなに悲しい出来事があったなんて……っ！！うおーんっ！！」

「事故があつた現場にいた野次馬は、パパの遺体を見てこう言ったのよ……。」

『うっわ、すっげえデブ！！』って！！

その時あたしは思った、ううん誓ったわ！！

自分の外見を鼻にかけている奴なんて絶対に好きになんかならな
いって！！

パパの言う通り、人を憎んだりはしないわ……でも、絶対好き
になんかなれないのよっっ！！」

大声で泣く透子を見て、なんだかやるせない気持ちになってしまっ
たジョンとベンジャミン。

「確かに……、外見だけで人を判断することはいけないことだ。

第一印象だの何だのと言っても、所詮人は中身……心がなければ
恋愛も成立などしない。

もしこのまま21世紀の美が『デブ』になったとしたら、それは
真の意味で人間の価値が問われるのかもしれない……。

人間の美は外見じゃない……、その精神だということに。」

透子の話に心を打たれてしまったベンジャミンが一人で悟りを開く。

「ちよっ・・・ベンジャミン先輩!？」

それじゃ彼をこのまま母星に帰すと言うんですか!？」

これは日本だけじゃなく世界中に影響するかもしれない重大なことなんですよ!？」

「バツツカヤローーッツ!！」

涙をたつぷり流したベンジャミンがジョンを殴り飛ばす。

「お前にはまだわかんねえのかっ!？」

人間の価値は最初から外見じゃなく、内面にあるんだよ!！」

見てくれがデブでもよお・・・、オレ達にはもっと大事なモンがあるだろ。

・・・Heartさ。

21世紀には外見じゃなくHeartが勝負を決めるんだよ。」

そしてようやくジョンまで悟りを開いたその時、辺りが明るい光で輝きだした・・・タリーである。

タリーの姿は『デブ』から、いつものハニワの姿に戻っていた。

「・・・タリー?」と、透子。

「あなたの気持ち・・・しっかり受け止めました・ぽー。

人間の美は外見から来るものではなかったんだ・ぽー。

幾世紀もの時を重ねてきて・・・、それを教えてくれたのはあなた達だけだ・ぽー。

間違っていたのは僕達の方だったんだ・ぽー。

人間の真の姿は、心の中にあるんだ・ぽー。

僕は本当の意味で大切なものが何なのか認識した・ぽー。

ありがとうだ・ぽー。

21世紀にはきつと心の豊かな人間で溢れると思う・ぽー。

・・・もうお別れだ・ぽー、さよならだ・ぽー。」

そう言うとタリーの元へ、ものすごく典型的な円盤UFOが姿を現す。

再び光に包まれ、そしてタリーの姿は消えて・・・円盤は遙か上空に向かって飛んで行った。

「タリー・・・、行っちゃった。」

最初は自分の趣味の面白半分だったのが、自分の心の真意を知ることが出来て感謝の気持ちすらある透子、それは舞も同じだった。

「そう・・・よね、どんなに思ってもこれは所詮アニメ。」

現実とごっちゃにしたらいけないんだよね、あたしもしっかり現実を・・・心を見なきゃいけないんだよね。」

そう言って舞はパステースに忍ばせていたアニメの切り抜きを破り捨てた。

「へっ、NASAに帰ったらクビだけじゃ済まされないかも・・・」

。「と、ベンジャミン。」

「先輩、自分はどこまでもベンジャミン先輩について行きますよ！
だってオレ達・・・、パートナーでしょ。」

互いに見つめ合い、微笑むジョンとベンジャミン。

これでめでたくハッピーエンド・・・と思いきや、ジヨンがある」とに気付く。

「そういえば21世紀からは人間の姿は何をベースに時間が流れていくんでしょうね？」

もう外見にこだわらないと言っても・・・。」

突然よくわからないことを言い出す。

「え、なに!？」

UFOに乗る時はいつものハニワの姿をしてたけど・・・そのまま母星に帰ったから

何だっていうの!？」

ジヨン達が何を言いたいのかわからない透子が、質問する。

「だってタリー君は、人間外見じゃなく心って言うてたんだから・・・別に。」と、舞。

少し嫌な予感でもしたのか、笑顔がひきつりながらベンジャミンが口にする。

「いや、人間の心だけは彼らにはどうしようも出来ない。

あくまで外見の美を管理しているから・・・、ひよっとしたら・・・。」

ちょっとエグイ想像をしてしまったベンジャミン。

おもむろに頭の中がハニワ一色になる4人。

21世紀の地球・・・、ひょっとしたらハニワ人間が急増するの
か
もしれない・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6690h/>

はにわ ぱにつく

2010年10月9日15時09分発行